
狼少年と兎少女

七夜色 諷狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼少年と兎少女

【Nコード】

N2357U

【作者名】

七夜色 諷狼

【あらすじ】

春の出会いがつかせた嘘は心に隙間を生み、その隙間を満たすように新たな気持ちたちが交差する。……ある意味青春？

第一話：心の隙間 「オオカミ編」

「春」と言う季節にどんなイメージを抱いているかは当然ながら人それぞれで、でもどんなイメージも大抵はありきたりで世の中にありあふれているような物が多い。

「始まりの季節」とか「一年の始まり」とかね。

僕のだってきつとそうだ。「自分を取り巻く環境が変化する季節」、間違っていないだろう？

しかしながら今年からは、昨日を境にそのイメージが変わった。今までには思いもつかなかった……いや、思いついていても自分で否定していたイメージとでも言おうか。

そいつはこの上なく思いつきりベタな代物で、感情さえあれば誰でも経験があるものだ。

――――
――――
――――

幼稚園児がお絵かきの時間にクレヨンで書いたような、見事なまでの濃青が彩る新春の空、雲が春の陽気にやられて降らせる物を間違えたんじゃないかと思うほどの淡桃の桜の雨。それを踊らせるそよ風と大地を抱く柔らかく優しい日の光。

大抵の人間に、まさに春！！と言わせるだろう絶景だ。しかし今、僕にはそれが出来ない。口はガムテープでふさがれていて、手は鈴蘭テープで野球グラウンド用のライトに結びつけられている。今僕がいる場所は校舎から一番離れた野球グラウンドの隅のバックネット裏。

「あの、これは何でしょうか……？」

「う、うるせえ！！ 大人しくしてろよ！？ 大声とか出したらブ

ツ殺すかな!!」

「えっ!?! はい……」

「お前え、ここまで来るのに誰かに見られたりつけられたりしてねえだろうな!?!」

「はい、それは大丈夫かと」

僕は目の前にいる人に呼び出された。

今朝登校して机に教科書を入れると何かがクシャと音を出した。机の中を探ると端の折れた可愛い小さなメモ紙が入っていた。

その紙には『昇降口のロッカー2225』と書かれていて「来い」と言いたいことが一発でわかった。

しかし……。

「あれ……」

てつきりロッカーの前にいると思ったのになあ。

だとすると、ロッカーを開けろってことだよな? 何か、ちょっと後ろめたい所があるけど開けてみるか。

「おっと!!」

一枚の紙が落ちてきた。そこには『昼休み…グラウンドの体育倉庫にて待ツ』と書いてあって今にいたる。

「おい、お前」

「あっ、はい?」

「オオカミって奴は何で来ないんだ?」

「え、おおかみさん……ですか? どんな字を書くんでしょう?」

「漢字はわかんねえ……けど、オオカミって呼ばれてる男子がいるんだろ? 何か、名前的に強そうじゃん?」

「ああ、なるほど。それで呼び出しを……。……………」

「何だ? どうして黙るんだよ」

「では何故、僕がいるんでしょう?」

「だから今!! 何でオオカミが来ないのかって聞いたんだよ!!」

「えっ!! あ、はい、って何で僕に聞くんですか!？」

「はぁ……。オオカミって奴に手紙出したのに、お前みたいなやつワイのが来るからだよ!?!?!」

「オオカミに手紙……って手紙は僕の机に入っていましたよ?」

「……………」

「……………」

空間の時間が季節外れにも凍結していた。何だ? 違和感がある……。

「お前、名前は?」

「大館、神乃……です」

「おおだてかみの……。ヤワイし、女々しい名前だな。じゃあ大館。男子としてオオカミって奴に聞き覚えは?」

「オオカミ……大神……。あぁ、いやでも……ん」

「何だ何だ? 何かあるのか?」

「いや、僕のあだ名……名字と名前の頭文字をとって、大神です」
「あぁ、だからお前が来たのか……って、ええええっ!?!?!」

「ど、どうしました?」

「お、おとお前が!? お、オオカミなのか……?」

「狼、ではなく大神ですがね」

「……はぁ。アタシがバカだった……。確認もしないで名前だけ聞いて手紙書いて呼び出して。どおりで弱いと思った」

「でも、後ろからいきなり殴って気絶させるのもどうかと」

多分、バットかパイプだと思うけど、あんな所殴られたのは初めてだよ。

「い、いや……悪い。代わりに来るくらいだし、お前ダシにしたらオオカミが来るのかと思ってさ」

「あ、あははは……。あぁ。じゃあこれ、解いてくれます?」

手首は縛られてさらに手はグーのまま麻袋のような袋に入れられていて、何とも準備がいい。

「ダメだ」

「何で!？」

「……解いた瞬間に殴るん……だろ？」

「へっ？」

「だって、一方的に間違われて金属バットで首裏殴られて、終いは縛られたんだぞ？」

「やっぱりバットだったか、しかも金属とは……。明確な殺意があったとしか……。」

「滅茶苦茶痛かったですけど、まあ理由もわかったし、呼び出した人が羽咲さんでしたし……。」

「え」

「『え』？　って何です？」

「今、何て」

「あれ、うざきさん……じゃなかったですか？」

「あ、アタシの名前……知ってんのか!？」

「そりゃあ……まあ」　うちの高校がかなり荒れてる原因だと言ってもいいんじゃないかな？　口が悪くて喧嘩っ早くて力が強いってことで有名な人だ……こんな人が相手じゃ怒ろうにも怒れるわけがないよ。

「『そりゃあ』何んだ？」

「えっ。あ、あぁっとお……。」

「ハッキリしろおお!!」

「はいっ!!　羽咲さんって魅力的だから、印象深くなって!!」

「ふえっ!？」

「ヤバっ、とっさに何か言っちゃった!!　何だよ印象深いって!!」

「い、いきなりごめんなさい」

「て、てめえ……。」

「ヤバい……殴られる!!」

「案外勇気あんだな」

「は？」

「サンキュー。でも、アタシがお前みたいなのヤツワイ奴なんかと付

き合ったら。ダチに示しが付かねえんだ。悪いけど今のなしな」

「は、はあ……」

言いたいことを言い終わると袋から手を出して、目の前にちらつかせてから手にカッターを握らせた。

「いいか、アタシが見えなくなってからカッター使えよ？」

「……」

「どうした？」

「い、いえ。わかりました」

一瞬、照れくさそうに目を反らした時、可愛かった……。きつと、気まづかったんだろうな。

……あれ、待てよ？　もしかして僕……。わけもわからずに無意識で告白して……。ふ、ふられた！？　し、しかも……。学校一の不良少女に！？

――

――

――

確かに僕の周りの環境は変わった。あの日から3日、毎日のように視線を感じるようになった。

第一話：心の隙間 **「オオカミ編」** **（後書き）**

続きます。

また次回会いましょう

第二話：心の隙間 「ウサギ編」

不良の言われに「血も涙もない」とか「冷酷非道」とかがあるけど、すぐくありきたりだ。でもそれがアタシのイメージらしい。

高1の半ば頃の時にはちよつと前までは何でもない振りして内心めっちゃめっちゃ気にしてた。けど、高2になった今ではアタシの誇りだ。このアタシを慕ってくれるダチもいるし、何もしくなくてもアタシを怖がって勝手に何でもしてくれるから学校の中でもわがまま通るし。

だいたいのはわがままが利いて何とかなってたから今更高校生活に不満とか文句もない、つもりでいた。

アタシは（始業式の）十日くらい前から悩みを抱えている。ある男のせいだ。

――――
――――
――――

ふう。やっぱり朝のランニングは最高だ。汗を流すと風が気持ち良いし気分もすっきりするよなあ。それに桜の蕾も膨らんできて雰囲気も良い感じだし、ランニング後のスポーツドリンクも格別だ。

うん！！

「あの」

「んあ？」

「これあなたのじゃないですか？」

「っ！？」

話しかけてきた男の顔を振り返って見た時、今までには一切感じたことがなかったモヤモヤが溢れてきた。な、何だこれ？ 頭ん中がグラグラして、まともに顔上げらんねえ！！ な、何なんだよこ

いつ!! 何かの能力者か!? いや……これが噂の一目惚れ……か?

「さっき走ってる最中にポケットから落ちませんでした?」

「えっ!! な、何が!？」

「いやだから小銭入れ、ですけど……?」

「ふえっ?」

ポケットに……ない。帰りに飲む飲み物代がない!!

「さ、さーせんした」

アタシとしたことが夢中になりすぎて、全く気付かなかった。

「良かった、はい」

「ふええっ!？」

アタシの手を掴んで手のひらに触った瞬間に顔が熱くなってしょうがない。ど、どうしよう……。

「あ、えーっと。ちゃんと持ち主に返せて良かったって意味ですよ?」

「あ、ああ……」

どうしようどうしようどうしよう!! あっ……ウチの高校のバッチだ。

「それじゃ僕はこれで」

「え? あ、ああ」

不思議な能力者男Aはアタシに小銭入れの巾着袋を握らせると、そのままアタシの脇を抜けるように去っていった……。アタシが身長163だから170くらいかあ? あの目線の高さ、いいなあ。

――

――

――

それからのアタシはボーっとしてそのことを考えていた。あのバッチが襟についてるってことはウチの生徒なんだな。あんなダ

ツセエバッチつけられつか、なんて考えてたけど今回ばかりは礼くらい言おう。バッチありがとう!!

問題は名前も学年もわからねえ奴をどうやって見つめるかだな。出席簿にもさすがに写真までは付いてねえしなあ……。かと言って片っ端から教室入って探すつても……。

そうだ!! 玄関で張ってれば来た瞬間にわかるし使ったげた箱から学年とクラスがわかるじゃねえか!! しかもクラスでの番号までわかるとくれば、やるしかねえ!!

ー始業式当日…朝ー

……こねえな、もしかしてもう校内に!? いや、そりゃねえな。アタシは校門が開く瞬間に来たからアタシより早くなんて無理だな。

校則通りにバッチつけてる奴が遅刻なんて無いだろうし……。

「あれ、舞さん? 今日は早いんスね、何か用事っスか?」

「ん? ああ、谷樹か」

「どうしたんスか? 登校してくる連中ジツと見つめて」

「探してる奴がいんだけどよ、なかなか来ねえんだよ。遅刻すんぞ?」

「遅刻ってまだ7時2分っスよ!? こんな時間に登校するやつは始発で来てるような奴ばっかですからまだまだ遅刻なんてしないですよ」

「あつ、なるほどな」

……つまりアタシ、気張り過ぎたのかあああつ!?

「それで、誰を探してるんスか?」

「え? えゝつとなあ……背丈が170くらいの男」

「へえゝ。あ、ヤルんだったら他の連中も呼んで加勢しますよ?」

「ち、ちげえよ!!」

「あつ、違うんスか? じゃあ何で……?」

「ちょ、ちよつとな」

「ん？」

120分後1

「ああ!! まだなのかよ!! 今何時だ」

「今携帯見ますね……あれから20分近くも待ってますけど、そんなに大事な用なんスか？」

「くそ。名前さえわかりや、こんなことにならねえのに!!」

「えっ!!? 舞さん、名前も知らない男の為に張ってんスか!？」

「お、おう……」

「アタシ、何してるんだろ……。何かもうゴタゴタじゃねえ? やっぱ気のせいかな? 今日は諦めっかな……」

「……あつ、来た」

「あいつだ!! 間違いねえ!!」

「えっ!!? どいつスか!？」

「ほら、今あくびした奴!!」

「ああ、大神っスか？」

「何だ!?! 谷樹、お前え知ってんのか!?! あいつ狼ってのか!?!」

「大神って呼ばれてることだけっスけど、名前まではちよつと。つかあいつ、見るからにヒョロイじゃないっスか!! ホントあいつに、何の用なんです……?」

「なあ、あいつが何年何組かわかったか!？」

「え? 2-1……じゃなかったスか？」

「マジか!! あいつ同い年なんだな!？」

「はい、……たしか」

「何だよ、まだまだ諦めるには早えよ!!」

「舞さん、そろそろ何があったのか……」

「おい!!」

「は、はひいっ!!」

「これ、アタシのげた箱に入れとけ。場所わかるよな」

「えっ!? わ、わかりますけど、って!! 舞さん!? どこに行くんスカ!!」

よし!! 先に教室に言って机にこいつをいれりゃあ計画通りだ!!

「はあ……。何なんだろうこの可愛い紙。何で大神に用があるのに舞さんのげた箱に入れるんだろ。それに大神が来た瞬間にめっちゃ笑顔だったけど……。本当に何が……?」

一組の教室の前まで来たのはいいけど、どうしたもんか……。朝っぱらから乗り込んで教師の奴ら呼ばれんのもダリイしな。でも早くしないと来ちまうよ!!

一組に飛込がいると思ったら、あいつどこ行っただよ!!

「あっ、おい!! 飛込!!」

「おっ? お姐えさん。今日も可愛いねえ」

久しぶりでも飛込も相変わらずだな……。じゃなくて。

「アタシのことは今はいいいんだ!! これ、オオカミの机に入れていってくれ!!」

「カミノンの机に?」

「ああそうだ。あいつが来る前に頼む。っつか今すぐ入れてくれ!!」

「? わかった!!」

よし、何とかこれでうまくいったあ。後は昼まで待てば!!

「う……。」

緊張してきたあ。呼び出した場所は一目につかない所だけやっぱり恥ずいし言えねえよあ。

「本当にどうしたんスカあ? 朝はあんなにバタバタしてたし、三時限目終わった時からソワソワして落ち着かないみたいですし…

…」

「何でもねえ」

「いや、その弱々しい返し方からして、もうダメじゃないスカ……」
「アタシ振られたらもう学校に来れねえや……」。

「まあ 昼飯食って元気出しましょうよ。ウチ、ひとつ走り言ってますから」

「昼飯かあ、何食おう」

「焼きそばパンあたりが無難か。……え？ 昼飯？」

「おい谷樹！！ 今、何時だ！？」

「えっ？ 12時15分ちよい前っス」

「緊張し過ぎて時間忘れてたあああっ！！」

「悪い！！ ちっと野暮用があったんだ！！ 行ってくる！！」
「猛ダッシュだ！！ 間に合え！！」

……。

「はあはあ……。もうちよいだ！！ まだ来てませんように！！」

「あれ？ 誰もいないや。やっぱりイタズラだったか」

「あれはオオカミ！！ やっぱり先越されたか。」

「うおおおりやああああ！！」

「ん？」

『ゴアンっ！！』

「あ……」

「やべえ、殴っちまったよ！！ どうしよう伸びてる……。アタシのせいだし放っておけねえしなあ。」

「何か誤魔化す良い方法ねえかなあ。オオカミ起きたら怒るよな……」。

「……あっ。そうだ！！」

「確か、そのこの体育倉庫に鈴蘭テープが……。ああ、あったあった。ん？ 何だこの小さい袋。……使えるなあ！！」

「おっ、ガムテ見つけ!!」

……アタシ、何か間違ってるな……。

110分後1

「あの、これは何でしょうか……?」

「う、うるせえ!! 大人しくしてろよ!? 大声とか出したらブツ殺すかな!!」

何なのかはアタシが聞きてえよ。何でとっさに手が出ちまったのかな……。野球グラウンドまで引きずって来て挙げ句縛るなんて……。

それに何で簡単にブツ殺すなんて言うの!? アタシい!!

「えっ!? はい……」

ほら、完全に怯えてる……。

「お前え、ここまで来るのに誰かに見られたりつけられたりしてねえだろうな!?!」

見られてたら、本格的にかなりマズい!! 殴って気絶させて縛るなんて退学もんだよ!!

「はい、それは大丈夫かと」

アタシはあの後、今までとは別の意味でボーっとしてて、暫くして落ち着くと結局『誤魔化す』事を選んだ。間違ってるとはわかっていても、恋愛とか興味もなかったアタシには何も思い付かなくて、これがこの場を切り抜ける唯一の道だ。

アタシの計画では、オオカミって呼ばれてる奴が強そうだから呼んだけど勘違いだった。しかもアタシはこいつをオオカミとは知らない、と言う具合だ。それ以外のことは考えてないけどな。

「おい、お前」

「あっ、はい?」

「オオカミって奴は何で来ないんだ?」

「え、おおかみさん……ですか? どんな字を書くんでしょう?」

お前えのことなんだよ!!

「漢字はわかんねえ……けど、オオカミって呼ばれてる男子がいるんだろ? 何か、名前的に強そうじゃん?」

「ああ、なるほど。それで呼び出しを……。……………」

「な、何だ? いい所までシナリオ通りに来てるんだ!! 何で詰まる!!」

「何だ? どうして黙るんだよ」

「では何故、僕がいるんでしょう?」

「変な所鈍感だなあ。そのまま、スパッとわかれよ!!」

「だから今!! 何でオオカミが来ないのかって聞いたんだよつ!!!!」

「えっ!! あ、はい、って何で僕に聞くんですか!?!」
「ちよつと無理あったか、説明するか。」

「はあ……。オオカミって奴に手紙出したのに、お前みたいなやつワイのが来るからだよ!!!!」

「オオカミに手紙……って手紙は僕の机に入っていましたよ?」

「わかってるよ。だってアタシが入れさせたんだもん……」

「はあ、失敗確定プラス次のチャンスも確実にない……。アタシ最悪だな……」

「……………」

「……………」

「あれ、もしかしてアタシの演技が下手過ぎてバレてる!?!」
「何か言わないと間に負ける!!」

「お前、名前は?」

「大館、神乃……です」

「あれ? 名字も名前もオオカミじゃないじゃん。」

「まさかアタシ、本当に宛先ミスった!?!」

「おおだてかみの……。ヤワイし、女々しい名前だな。じゃあ大館。二年男子としてオオカミって奴に聞き覚えは?」

「オオカミ……大神……。ああ、いやでも……ん」

「何だ何だ？ 何かあるのか？」

教えてくれ！！ アタシは間違ってるのか！？

「いや、僕のあだ名……名字と名前の頭文字をとって、大神です」
あゝ……。間違いじゃないみたいだな。とりあえず、何か反応しないとマズいな。

「あゝ、だからお前が来たのか……って、ええええっ！！！？」
「ど、どうしました？」

「お、おおお前が！？ お、オオカミなのか……？」
いや、本当はわかってるよ？

「狼、ではなく大神ですがね」

「……はあ。アタシがバカだった……。確認もしないで名前だけ聞いて手紙書いて呼び出して。どおりで弱いと思った」

もつと違う意味で馬鹿だよ……。ごめんな大館え。

「でも、後ろからいきなり殴って気絶させるのもどうかと」

ごもつともだ。返す言葉もない……。

「い、いや……。悪い。代わりに来るくらいだし、お前ダシにしたらオオカミが来るのかと思ってさ」

本人いるっての。

「あ、あははは……。はあゝ。じゃあこれ、解いてくれますか？」

しまった！！ 誤魔化せたけどまだ先のこと考えてなかった！！

「ダメだ」

「何で！？」

こうなりやアドリブだ！！

「……解いた瞬間に殴るん……。だろ？」

「へっ？」

「だって、一方的に間違われて金属バットで首裏殴られて、終いは縛られたんだぞ？」

金属バットってことにおかねえと、素手で殴って気絶させられたなんて思われたらアタシのイメージが化け物になっていく！！
「滅茶苦茶痛かったですけど、まあ理由もわかったし、呼び出した

人が羽咲さんでしたし……」

「え」

思わず声が出ちゃった。アタシ手紙に名前書いてないんだけど……？

「『え』？ って何です？」

「今、何て」

「あれ、うざきさん……じゃなかったですか？」

いや、あってるあってる！！

「あ、アタシの名前……知ってんのか！？」

「そりゃあ……まあ」

あ、そういやアタシ、いつもわがまま言ってるから有名か。そこんどこも聞いてみつか。

「『そりゃあ』何んだ？」

「えっ。あ、あぁ……とお……」

「ハッキリしろおお！！」

「はいっ！！ 羽咲さんって魅力的だから、印象深いなって！！」

「ふえっ！？」

ヤバい……。めっちゃ嬉しい！！ これってあれか！？ 脈

ありってやつか！？

「い、いきなりごめんなさい」

「て、てめえ……」

おおっと、危うくまた手が出かけた。今気付いたけどアタシって危険だな……？

「案外勇気あんだな」

「は？」

当然の反応だろうけど、殴られると思ってたんだろうな。何か寂しい……。

でも、出任せの嘘でもさっきのは嬉しかった！！

「サンキュー。でも、アタシがお前みたいなヤツワイ奴なんかと付き合ったら。ダチに示しが付かねえんだ。悪いけど今のなしな」

……こうしないとダメだよな。惚れた相手まで殴るなんてやっぱ
りいけねえよ。

「は、はあ……」

アタシは言いたいことを言い終わるとカッターを握らせた。

「いいか、アタシが見えなくなってからカッター使えよ？」

逃げる時間が必要だかな。

「……」

「どうした？」

「い、いえ。わかりました」

よし、善は急げだ。

「はあ。何やってんだろ……」

屋上から見下ろしてさっきまでいた野球グラウンドのお……（キ
ヤッチャーがいる所の後ろらへん何て言うんだ？）を見ると大館の
姿はない。上手くいっただけ。

「はあ。自業自得とは言え、最悪な1日だ」

「あ、いたいた。舞さんここにいたんスね」

谷樹か……。

「今は、放っておいてくれ……」

「お姐えさん、あんなの気にしないで？」

「え？」

「ば、バカ!! 飛辻!! さっきあれほど言うなと!!」

「てめえらあ……見てたのかあ？」

「滅相もないっス!!」

その反応がもう肯定してるっの!!

「そうだよ!! 私たち姐えさんが人縛ってる所なんて見てなっ……

……」

「だから、言うなって!! ……ひいっ!!」

「おめえら、覗きたあ良い趣味だなあ？」

「ち、違うんスよ!? これはたまたまっスね!？」

「ほう〜？ たまたま？ 何がどう違うのか、キッチリ聞いてやらあ！！」

「「ひ、ひゃああああああっ！！！！！！」」

「ほら、聞いてやる。それぞれ言い分を言ってみろ」

「ウチは姐さんが朝から雰囲気おかしかったんで、気になってつい行ったんス……。すいません……」

「おめえは？」

「姐さんから預かった紙が気になったし、カミノンの様子が変だったから……」

「大館をつけたのか？」

「はい……」

「はあり、2人揃ってストーキングか」

「お、お言葉っスけど……」

「んあ！？」

「ウチらにくらい、何すんのか教えて欲しいかったっス……」

「だって、お前らバカにすんだろ……」

確かに、ヒョロイし弱そうだけどよ……。

「私はむしろ、手伝いますよ？ 姐さんの恋路」

「あ、飛辻！！ 抜け駆けすんな！！ もちろんウチもっス！！ 舞さん！！」

「……嬉しくなんかねえ！！」

別に照れてもいねえ！！

「あはは。わかってますよ舞さん」

「じゃあまず、カミノンの観察から始めましょうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2357u/>

狼少年と兎少女

2011年8月22日03時40分発行